

新聞でみる恩納村と病害虫

恩納村の基幹産業のひとつでもある農業は、常に病害虫との戦いと隣合わせです。ここでいう病害虫とは、農作物に対し「正常な働きや構造を害し生育に変調をきたし、その原因が持続的に働いて農作物の機能や発育を阻害するだけでなく、品質や外観を損じて商品価値を低下させる」虫のことです。病害虫による被害は葉・芽・茎・花・根などがかじられる、穴をあけて中に住む、葉に斑点ができる、養分を吸い取られ作物がしおれるなど様々です。

農作物に影響を与える病害虫類にはミバエ類やアフリカマイマイ、蛾類など様々なものがありますが、恩納村では明治時代から戦後にかけては特にサトウキビ（甘蔗）や稲につく害虫に悩まされていたようです。今回は恩納村史編さん係が収集している新聞記事の中から一部を紹介します。

【新聞記事にみる恩納村の様子】

《戰前》

まず初めに恩納村の文字が確認できるのは1912(明治45)年6月22日琉球新報の記事です。「甘蔗害虫の発生」の見出しで、中頭・島尻や金武・久志・恩納など国頭郡の一部にサトウキビにつく害虫が発生したため、該当地域に技術担当者を派遣したことが報じられています。

●甘蔗害虫の発生 先月臺中頭島尻の各村及び金武久志恩納等國頭郡の一部に甘蔗害虫發生したる爲め其筋より農商課、農事試験場の技術者を各地方に派遣して驅除方法を講究しつゝ、わり害虫の種類は螟虫と稱するものにして被害の甚しき所は一割四五分の甘蔗を枯死せしめた所もありと云ふ其の外昨今新虫の發生時期に向ひつゝある爲め各村にては之が驅除にも奔りしつゝ、わり猶ほ勝連村及び久志村にては甘蔗の黒

(1912年6月22日琉球新報)

1933(昭和8)年3月31日

○甘蔗害虫の發生　先月臺中頭龜尻の各村及び金武久志恩納等國頭郡の一部に甘蔗害虫發生したる爲め其筋より農商課、農事試験場の技術者を各地方に派して駆除方法を講究してゐり害虫の種類は螟虫と稱するものにして被害の甚しき所は一割四五分の甘蔗を枯死せしめた所ありと云ふ其の外昨令蚜虫の發生時期に向ひつゝある爲め各村にては之が驅除にも奔走しつゝあり猶ほ勝連村及び久志村にては甘蔗の黒穗病も發生せり

琉球新報(1912年6月22日)

《戰後》

の沖縄日日新聞「甘蔗水稻メイ虫（※1）の被害甚大で徹底的駆除を断行！」では、恩納村を含め全県的に螟虫類めいちゅうの被害が甚大なため、県をあげて一斉に駆除を行うことになったとあります。この時はさらに「懸賞に依り賞金を交付して側面より駆除奨励」と、賞金も出して害虫駆除を促していました。1938（昭和13）年4月3日、1939（昭和14）年8月9日の沖縄日報では県が各地の病虫害防除のために補助金を出したことを報じています。

三部落が納税百%

[illegible]

沖縄タイムス
(1954年6月27日)

イムス、6月28日の琉球新報には恩納村で産業共進会の褒章授与式があつたことが伝えられています。記事には、生産による成績だけでなく「病害虫駆除成績」の項目がみられ、村民にとって大事な作業であつたことがうかがえます。

1958(昭和33)年2月2日の琉球新報では、県が各地の病虫害防除のために補助金を出すことを決定したとあります。しかし同年の5月7日の記事では、沖縄県内において80年ぶりといわれるほどの虫の害が出たことが報じられました。メンガ虫(綿ガ虫)と呼ばれる虫で、この害に対して「各市村ではまん延予防に小学3年生以上の全村民を挙げて、綿ガ虫駆除と防虫に動員、農家の駆除薬品購入費を村で補助する」などの対応にあたりました。恩納村では「166反のキビ畑全面的にまん延、被害は大きい。村普及員が毎日各部落に繰り出され、5、6名ずつのグループが高圧噴霧器で駆除に大童、おれちわ農薬が不足だといわれ被害は増大の傾向」とあります。